

谷津ミュージアム事業推進専門家会議 会議の概要

- 1 会議の名称
令和元年度 第1回谷津ミュージアム事業推進専門家会議
- 2 開催日時
令和元年7月11日(木) 午後2時00分から午後5時00分まで
- 3 開催場所
我孫子市都部611番地先 岡発戸・都部谷津ミュージアム作業小屋
- 4 出席した委員
(出席委員)
浅間 茂委員 谷城 勝弘委員 平岡 考委員 松下 直子委員
- 5 欠席した委員
(欠席委員)
長谷川 雅美委員
- 6 出席した事務局
(事務局)
海老原課長 倉島課長補佐 藤澤 濱田
- 7 会議に付した事項等
 - 委員長及び副委員長の選出
 - 現地視察(谷津ミュージアムの維持管理について)
- 8 公開・非公開の別
公開
- 9 傍聴人
2名
- 10 会議の内容

<谷津ミュージアムの事業専門家会議委員長・副委員長の選出>

専門家委員の委嘱に伴い、委員長・副委員長の選出をお願いした。互選により、委員長に浅間委員、副委員長に谷城委員が選出された。

<現地視察後の各委員からの意見>

谷城副委員長：ここの谷津は非常に良い風景であり、植物だけでなく様々な生き物が多くいる。現役時に自分の田んぼを荒らしてしまったが、退職後に管理を始めるとその田んぼにいろいろな生き物が蘇り、多様性が復活してきていると感じる。谷津には、数多くのボランティアの方が関わり、維持管理をすることで、人間の生活と共にある自然となる。今後も、必要に応じて手を加えていただき、出来る範囲で管理をし、末永く維持していただきたい。谷津の生物の名前を1つでも多く表示して、観察者に紹介もしていただきたい。

松下委員：毎回、谷津ミュージアムに来る毎に新しい発見がある。谷津は、我孫子市だけではなく、千葉県、日本にとって、非常に大切な場所である。訪問するのが、一年経つと昨年と変化の無い所と過去の会議の意見が反映されている所があり変化を感じた。都会の子どもと比べると、谷津のような自然がある場所で育つ子どもは感受性が豊かになってくると思う。NEC 我孫子事業場において、オオモノサシトンボ（絶滅危惧IB類（環境省レッドリスト2019））の保護活動を行っており、6月に観察会を開き今年度もたくさんオオモノサシトンボを確認することが出来た。同じ我孫子市ということもあり、これからも保全活動を続けていきたいと感じた。

平岡委員：谷津を維持管理するために、多くの方が関わって手を入れていただいていることに感謝している。多様な生物の棲息環境とするために、田んぼや藪など複数の環境がモザイク状にあることは大切。今日歩いて、ホオジロがあちこちにいたほか、キジも見られた。また最近ヒクイナも観察されているとうかがった。ヒクイナはここ数十年日本中で激減しているが、もともと枕草子でも取り上げられた夏の風物詩で、日本の農村環境では普通の種だったのだと思う。こういった種が観察されるこの場所の環境は、昭和30年代以前の農村に近いものがあるというてよいと思う。子どもが生き物を触ったり、泥まみれになるような原体験があることが、大人になって環境を守る意識が生まれることのために大切であり、ぜひこの場所で子供たちが自然にふれあう機会を作っていただきたい。

浅間委員長：家の前では、落ち葉はゴミだが、谷津では肥料となる。谷津以外の場所では、除草剤の使用によりハイケボタルが減ってきている。自然の維持については、多くの方との共通理解をすることで更に良い環境を作ることが出来る。また、オオブタクサ等の外来種をどう除いていくのか、対処の仕方について考えていかないといけない。アゾラに関しては、除草剤を使わなくて良かったと考えている。

<傍聴人による意見>

加藤氏：ヨシ原の辺りを復田するには限界であると専門家の方のご意見があった。市では、耕作している方に補助金を出している。また、谷津ミュージアムの会では、市民を公募し、少しでも田んぼを耕作している。谷津ミュージアム事業構想は、当初より後退しているため、現在、耕作をしている方が耕作を辞めた場合のことを皆で考えていかないといけないと思っている。